

演習型の初年次教育において学生・TA・教員のインタラクションを高めるICT環境の構築

椿本 弥生 (東京大学 教養教育高度化機構 初年次教育部門)

東京大学の初年次教育

- 早期学術体験としての初年次ゼミナール
 - ・自ら問題を発見・解決
 - ・Active Learning
 - ・文科生1,330名に64コマ、理科生1,880名に100コマを半期の駒場で開講
 - ・担当教員の多様な分野を活かした内容

「文章の心理学—読む・書く・測る—」

- 11回 x105分で研究する
 - ・文献読み → 仮説設定 → 調査・実験
 - データ分析 → 論文 (A4 2段組み 4000字以上)

授業外での研究活動が必須

学習環境

- 1人1台のPC
- 1クラス約20名
- 1クラス1名以上のTA
- Office 365 全学包括ライセンス
- スタジオ型教室
 - ・可動式の机&椅子、Wi-Fi & outlet



準備したコミュニケーション環境

- **Dropbox**
 - ・基本文献PDFの配布
- **Microsoft OneNote**
 - ・研究の記録、講義資料+αの配布
- **slack**
 - ・研究実施のための即時的なやりとり
- **Google Drive**
 - ・実験データの共有&分析



① 興味がある問題を探す

- ・基礎論文を読む
- ・研究グループに参加 (教員・TA・学生とも全グループの閲覧・発言可能)

② 仮説生成

- ・追加された基礎文献と、探した関連文献を読む
- ・読んだ文献を個人でまとめて共有
- ・グループで仮説を考える
- ・先行研究まとめと仮説の発表

③ 調査・実験の計画&実行

- ・方法や計画の相談
- ・素材の共有、予備調査・実験
- ・素材とこれまでの記録

⑤ 論文執筆&提出 (個別作業)

- ・教員・TAに質問
- ・記録の読み返し&追加
- ・文献の追加
- ・論文提出

④ 分析

- ・データ入力
- ・データ分析
- ・相談

※ 講義資料

- ・毎週の講義PPTをPDFにしたもの
- ・講義ルーブリック、文献の種類の見分け方と探し方、論文の書き方とテンプレート、発表へのコメントなど

やってみて気づいた利点

- 必要な情報を、必要なタイミングで提供できる
 - ・授業内で伝えるべき内容と、授業外でフォローする内容のメリハリをつけやすかった
 - ・各班が、各自の進度によって見るべき資料を(ある程度勝手に)見てくれた
- 全員集まる対面の時間でやるべき活動に集中できる
 - ・全体進捗のコントロール、基礎講義、フィードバック
 - 授業外での各班の活動のフォローアップ (演習) → 実演、詳しい解説、文献紹介、次ステップの指示
- TAと連携しやすい
 - ・プロセスが共有されるため相談・分担が容易
 - 授業評価アンケート「TAに助けられた」多数

やってみて気づいた課題

- 学生の「生の」活動プロセスは共有されにくい
 - ・LINEでclosedにグループワークした結果のみが共有されがち
- ひたすら時間をとられる
 - ・常に学生指導ができてしまう (そのぶんアウトプットの質は向上するが・・・)
- 提出場所の共有設定に注意!
 - ・提出させる場所によっては、誰かが消してしまうことも
 - バックアップを有効化する、提出はLMSにするなど